

平成 24 年 6 月 1 日

特定非営利活動法人日本バイオインフォマティクス学会  
第 3 回理事会議事録

日 時	平成 24 年 6 月 1 日 14:05～16:55
場 所	産業技術総合研究所 生命情報工学研究センター 10 階会議室 (東京都江東区青海 2-4-7 産総研臨海副都心センター別館)
出席者	(本人出席) 松田理事長、浅井副理事長、渋谷理事、大久保理事、藤理事、ホートン理事、 岩崎理事、佐藤理事、有田理事、中川理事、油谷理事、中井理事、水野理事、 (表決書提出) 馬見塚理事、江口理事、川島理事、木下理事、川本理事、西川理事、宮野 理事 以上 20 名出席 (オブザーバ、書記) 坂井 (事務局)

議長 松田理事長 (定款第 35 条による)

配布資料 議案書、議論、第 1 回理事会議事メモ

### 議事

#### 議事録署名人の選任

議長より浅井理事とホートン理事を議事録署名人に選任したい旨の提案があり、全員の賛成により承認された。

#### 第 1 号議案 公募研究会について

議長が配布資料 (議案書別紙 1) に基づいて今年度の公募研究会について説明し、全員の賛成により承認された。

#### 第 2 号議案 応用システムバイオロジー研究会の名称変更について

全員で配布資料 (別添「JSBi 第 3 回理事会第 2 号議案 議論」p.1-3) に基づき、事前にメールで行われた議論の内容を確認した。以下の質疑応答と議論があった後、白票を投じた馬見塚理事をのぞく全員の賛成により承認された。また副査の荻島先生は東北大学に異動されたことが藤理事より報告された。

#### 質疑応答 (〔〕内は発言者、敬称略)

- ・ メール議論に関して藤渕さんの反論は? [藤]
- ・ なかった。[事務局]
- ・ 中井理事のメール意見に賛成する。まだ活動を開始していない研究会にコメントできない。研究会活動は、この名称にふさわしい講演者が決まって、行われるはずである。名称にふさわしい活動になっていなければ反対のしようもある。[有田]
- ・ 名称変更に反対しない。新しい理論を研究してもらえばよい。主査の意見を尊重し、研究会

が活動しやすくすることに配慮すべき。活動開始後、名称がふさわしくなければ再考すればよい。〔松田〕

### 第3号議案 規定等(年会関連の規定を除く)の改定の件

#### 研究会運営規定(別紙2)について

研究会運営規定は、第4条第1項を次のように修正することになった。

原案 研究会には、主査1名、副査1名、及び運営委員を置く。主査、副査及び運営委員は運営委員会を構成する。運営委員会の委員長は主査が務める。

修正案 研究会には、主査1名及び副査を置く。必要に応じて運営委員を置くことができる。主査、副査及び運営委員は運営委員会を構成する。運営委員会の委員長は主査が務める。

修正案は全員の賛成により承認された。

なお修正案に関連して次の議論があった。

#### 議論 (□内は発言者、敬称略)

- ・ 運営委員の選任に関する規定はいらないか？〔佐藤〕
- ・ 運営委員の規定はいると思う。〔中川〕
- ・ 研究会がJSBiの名をかたって勝手に動き出したとき、2年間は主査らを辞めさせられないことになる。規定の不備ではないか。〔浅井〕
- ・ その問題に対応するため「正会員の中より」選任することを提案している。〔渋谷；規定類担当幹事〕
- ・ 研究会のコントロールが問題なら、4条2項は原案のままにしておいたらどうか。〔中川〕
- ・ 賛成する。本当にコントロールできない研究会が出てきたら、そのときに規定を再考しよう。〔浅井〕
- ・ この規定の本来の目的は、むしろ研究会をやめずに2年は活動してほしい、ということだったのでないか。〔松田〕
- ・ JSBiの目的や社会通念に反することを、JSBiの名をかたってやり始めると困るが。〔浅井〕
- ・ 会員の除名はできるのか？この規定では、正会員でなければ研究会は持てないので、除名できれば研究会を自動的に終わらせられる。〔佐藤〕
- ・ 定款第11条に除名規定があるので、会員の除名はできる。〔事務局〕

#### 地域部会運営規定(別紙3)について

地域部会運営規定は、沖縄地域部会が活動している実態を反映するため、第1条「九州・沖縄」が「九州、沖縄」と修正された（メール議論で修正案提出；当日配布資料には反映済み）。そのほかに第8条第1項を次のように修正することになった。

原案 この法人の会員以外の地域部会への参加は認めるが、原則として有料とする。

修正案 この法人の会員以外の者の、地域部会への参加は認めるが、原則として有料とする。

修正案は全員の賛成により承認された。

#### ニュースレター規定(別紙4)について

ニュースレター規定は、全員の賛成により、原案通り承認された。

## プライバシーポリシー(別紙 5)について

プライバシーポリシーは、全員の賛成により、原案通り承認された。

## 著作権規定(別紙 6)について

著作権規定は第 3 条頭書カッコ書き「著者」を「著作者」と修正することとなった。

修正案は全員の賛成により承認された。

## 第 4 号議案 平成 24 年度年会および平成 25 年度以降の年会と年会関連の規定改定の件

欠席する理事より、年会の公用語をどのように規定すべきか等意見が多数寄せられていたので、まず配布資料（議論）を全員で読み合わせ、論点を確認した。議場での議論の後、以下が決議された。

- (1) 年会開催規定(別紙 7) および Oxford Journals - Japanese Society for Bioinformatics Prize 選考規定(別紙 8) は、全員の賛成により原案通りに承認された。ただし今後も年会・賞の授与のあり方に対する検討を続けることとなった。  
また、JSBi 年会では英語の使用を推奨することについては、理事会での議論をふまえ、会長からメッセージを発することとなった。
- (2) 生命医薬情報学連合大会委員会運営規則(別紙 9) については、大会委員会・同事務局の位置づけ、管理体制が不明瞭であり、活動年度や存続年限に関する規定がないことが問題となった。とくに経理に関しては、JSBi の総意として、大会終了後に会計を締め、繰越金が生じない規定を作ることを、連合大会委員会に提案することとなった。
- (3) 平成 24 年度年会の体制(別紙 10) については、JSBi からは水野理事（中外製薬）が、平成 24 年度生命医薬情報学連合大会実行委員会の財務（監査）担当委員に就任することとなった。  
平成 25 年度年会の体制(別紙 10) については、JSBi 側の年会長には中井理事（東大医科研）が就任し、連合大会の副大会長を務めることとなった。

## 議論 (時系列で記載。[]内は発言者、敬称略)

### Oxford Journals - Japanese Society for Bioinformatics Prize 選考規定(別紙 8)について

- ・ 連合大会の関係もあるので、学会員でない人にも授与できるように規定案を書いた。〔渋谷；規定類担当幹事〕
- ・ 年会のポスター賞ではなく、1年の活動を通じてよい成果を出した人を選んで Oxford Journals - Japanese Society for Bioinformatics Prize（以下 OJ 賞という）を出すべきではないか。そして ISMB への推薦や若手奨励にも活用するといい。現状の年会はオリジナルな成果を発表する場では無くなっている、選考も十分に吟味されているとは言いがたい。ポスター賞は JSBi を代表する OJ 賞ではなく年会ポスター賞として独立させ、もう少し軽い位置づけとし、例えば複数出すようにするのがいいのでは。〔岩崎〕
- ・ それならば JSBi の研究会や地域部会における発表、優秀論文も対象にするか。〔佐藤〕
- ・ ありえる。この分野のよい研究を表彰したいので。〔岩崎、有田〕
- ・ 選考する能力が問われる。どの仕事に対する Award か明確にしたほうがよい。会員に授与す

るとか、自薦・他薦が必要、など受賞資格を規定に書き込むのはよくない。ちゃんといい仕事をしている人を（選考委員が）見つけて、（JSBi が OJ 賞をあげました、と）この OJ 賞のクレジットでその人を世の中に知らせるようであるとよい。これで受賞者を encourage したい。年会のポスターを対象とするなら、すべてのポスターをウェブで見れるようにしておいて、（年会に来た人以外でも）オンライン投票できるようにしておくのもよい。〔大久保〕

- 年会でポスター賞を選考する意義はそれなりにある。多忙な理事自身が、（選考委員として）ちゃんとポスター発表を見るようになる。〔浅井〕
- もちろん年会（連合大会）ポスター賞はあったほうがいい。先ほどの提案は、OJ 賞は年会ポスター賞とは別に（もっと権威ある賞に）したいという意図。〔有田〕
- 確かに、賞は多くて困らない。とくに若い人は賞を取れると、日本学生支援機構の奨学金の返還免除の審査に有利になることや、次のプロモーションにつながるなど、実際によいことが多いので、学会としてはそれを encourage したい。〔松田〕
- 企業内でも、受賞は社内誌に写真が掲載されるなど、名誉なことである。〔中川〕
- 若い人の Journal publication activity を自動で評価する、年齢と IF (Impact Factor) などをパラメータとした“評価式”を作つてみると。〔佐藤〕
- やはり候補者を発掘してくるのが大変なので、自薦や他薦でなんとか候補を出すような手続きは必要ではないか。〔浅井〕
- 審査対象者は自分でエントリーさせるとか。論文リストを提出させるなど。〔有田〕
- しかし OJ 賞はスポンサーが Oxford Journal という出版社だが、スポンサーへのリスペクトはどうするか？Journal とは違う評価軸にしておいたほうがよいのではないか。〔浅井〕
- 本気でまじめに選考しなければ、選考には必ず Stochastic 性が入ってしまう。実際に自分が選考委員としてどこまでまじめにやれるか、やるべきか、悩む。〔ホートン〕
- まじめにやろうとすると、審査するコストがかかる。J-GLOBAL などはわかりやすくしようとがんばっているが、まだ足りない。この審査コストを払うのは誰なのか。審査すべきものの価値はなにか。〔大久保〕
- IF5 以上なら自動的にあげるとか。〔渋谷〕
- がんばっている、いい若手と、5 年に 1 回くらいは出会う。こんないい人がいた、ということを、2 年に 1 回くらいお互いに紹介しあって審査するようなスキーム（もよい）。〔大久保〕
- 大久保理事の当初案（=ちゃんといい人を見つけて、どの仕事に対する Award か明確にして渡す）に賛成する。これまで選考委員をすると、なるべく、有力研究室でないところの人に賞をあげたいと考えてきた。しかし有力研究室に入ってしまうともらえない、というのも逆に不公平になる。賞の性格（コツコツ長年やった人を選ぶ、など）をきちんと決めたい。まじめに考えると難しい。〔中井〕
- OJ 賞を年会ポスター賞としないのならば、第 2 条を「会員の研究発表の中から選考する」としたらどうか。〔中川〕
- Award Ceremony は年会でやるのがふさわしい。賞の対象期間を前回の年会から今回の年会とするか。〔佐藤〕
- 選考委員（の人選にも工夫する余地がある）。科研費の審査員や論文のレビューをやっていないような若手が真剣に選んで候補者を挙げ、その中から理事会が選ぶなど。〔大久保〕

- ・ それなら研究会・地域部会から推薦してもらうのもよい。〔有田、佐藤〕
- ・ 若い人は偉い人に反抗しないので（若手に推薦させることが有効かどうか疑問）。〔中井〕
- ・ だから若い人にやらせたい。（自立してほしい。）〔大久保〕
- ・ 地域部会、研究会も推薦対象にすると、それらの全ての発表を（全選考委員に）見せろ、ということになり、事実上それは不可能である。現行の、年会のオーラル発表で一律に判断できるシステムはフェアである。また論文を対象とすると、（wet 系の論文誌のほうが IF が高い傾向があるので）実験の人と一緒にやった、IF は高いが 1st author でない論文と、IF も低いがインフォマティクス系でコツコツがんばった論文のどちらを高く評価するのか、判定基準が難しくなる。岩崎理事案はなかなか難しいと思う。〔油谷〕
- ・ 賞に値する研究が複数あればそれは望ましいことで、賞を増やすようにすれば良いと思う。〔岩崎〕
- ・ （論文を評価軸にする場合）1st author にするか、ボス的な人に与えるかというのもある。（賞には）若い人を encourage するという役割があるとはあまり意識してこなかった。〔ホートン〕
- ・ （世の中には）賞は権威者にあげるもの、という感覚があるが、そうではない。〔大久保〕
- ・ 議論は尽きないが、今年は原案の形で立ち上げるのはどうか。現実問題として、（今年の連合大会は 10 月なので）日がない。毎年、継続的に審議しよう。〔有田〕
- ・ 第 6 条の修正の必要はないか？〔佐藤〕
- ・ 連合大会のポスター賞とは別に OJ 賞をやることにするので、問題ない。〔有田〕

#### 生命医薬情報学連合大会委員会運営規則（別紙 9）について

- ・ これと JSBi 年会の関係が書かれていらないが、連合大会は JSBi 年会なのか？規則の不備ではないか？〔中井〕
- ・ JSBi 年会規定第 6 条で読みたい、という提案である。〔渋谷；規定類担当幹事〕
- ・ 連合大会委員会運営規則では、小長谷大会事務局長が定義され、各学会から独立して機能することになっている。また実行委員会、プログラム委員会の解散は盛り込まれているが、事務局の解散規定がなく、黒字の行き先がうやむやになっている。現状では事務局はよく仕事をしてくれているので、あまり文句を言って投げだされると現実問題として困るのだが。〔有田〕
- ・ 活動原資が大会参加費とすると、参加者がどう思うかにも配慮が必要だ。〔松田〕
- ・ 3 回くらい合同でやってみていいのだが、合同開催をやめて JSBi が抜けたとき、うやむやにされると困る。〔中井〕
- ・ 原則は毎年締めたいと考えている。〔有田〕
- ・ 黒字は、各学会の出資比率で戻すのか？〔浅井〕
- ・ それをちゃんと決めたい。JSBi の統一意見として、来週（の連合大会実行委員会に）持つていきたい。〔有田〕
- ・ 単年度で、繰越 0 になってほしい。また、経理規模が 1000 万円を超えると税務上ややこしくなるのではなかったか？〔中川〕
- ・ 残高ではなく事業総額が 1000 万で、か？〔有田〕
- ・ 昨年の年会では神戸市の助成を受けた関係で繰越金が出ないように收支を調整した。昨年の年会では事業総額が 1000 万円を超えたようであるが、課税事業者となるのは前々年の課税売上

高が 1000 万円を超えたときなので、今年の年会とは関係ない。〔松田〕

- ・ 今年の連合大会では繰越金は作らないようにしたい。〔有田〕
- ・ しかし連合大会委員会は、年度を越えて存続する規則になっている。連合大会委員会は、特定の一学会の下部組織ではないので、法人になるなど何かしらの実体を持たない限り、年度を越えて存続するのはおかしいのではないか？ 〔佐藤〕
- ・ 各団体からの代表者によるステアリング・コミッティーの必要性を訴えたい。今年の運営委員会には JSBi の正副会長も入ったが、今後どうなるのか。再来年問題（＝開催地が JSBi の意向と関係なく鶴岡に決まりそうな件）もある。〔浅井〕
- ・ 学会は連続する組織だからいいが、連合大会はそれがないから問題だ。〔佐藤〕
- ・ 固定された事務局があると、いずれ事務局が力を持って（大会を）コントロールし始めるだろう。〔大久保〕
- ・ とにかく会計監査のルールを作りたい。黒字は戻す、をルール化させたい。〔有田〕
- ・ 連合大会は企業スポンサーからの収入に頼っている面があるが、お金をもらうということは運営の自由は制限されているということだ。〔大久保〕
- ・ 連合大会は、3 つの会社が合同で事業をしようとしているのと同じなので、各社間の合意形成は重要だ。〔浅井〕
- ・ 本当に問題が起きたら、企業スポンサーはつかなくなるし、各学会の年会もやりにくくなる。（十分な注意が必要。）〔中川〕
- ・ 黒字は折半という案のようだが、CBI 学会がたくさん事務などをやったから、半分より多く取りたい、と言ったらどうする？ 〔ホートン〕
- ・ Omix と 3 分の 1 ずつはありえるが、Omix は CBI からメディカル寄りの人を集めたサブセットのようなものと理解しているので、JSBi : CBI : Omix = 5 : 5 : 0 と思う。実際「研究会」を名乗っている Omix が、学会のような組織なのかどうかよく知らない。連合大会と一緒にやることに問題はないとは思うが。〔有田〕
- ・ 経理のことは来週決めて来たい。〔有田〕

#### 今年度の体制（別紙 10）について

- ・ 空欄になっている財務（監査）担当委員を決めろ、とのことだが、空欄を全部埋めなければならないのか？ 〔中川〕
- ・ そうではない。広報や渉外など、何をするのかよくわからない、依頼されていないものもある。〔有田〕

#### 年会開催規定（別紙 8）について

- ・ 公用語問題では、会員にアンケートをとれ、という提案もある。ここは全員の意見を順番に聞いてみたいと思う。結論がどちらにあるべきか、それはどのように決めたらいいか、述べてほしい。〔浅井〕
  - ・ 規定担当幹事として発言すると、CBI 学会との合同大会のときに困らないよう、規定案に「原則として」という文言を盛り込んだ。
- 自分は英語がよい。自分の研究室には外国人が多く、日々のディスカッションも英語である。

- 日本語になると自分の学生を連れて行けない。〔渋谷〕
- ちなみに今年は、ポスター投稿（アブストラクト）は英語でやることになっている。  
英語で困らないので「原則として」案に賛成だ。
  - ポスターから選ぶ口頭発表のセッションを英語にするべきかどうかは議論の余地がある。〔有田〕
  - 使用言語は何でもよい。何語でも、わかりにくい発表はよくない。もし英語が苦手なら、スライドを英語で作って、はじめに英語で謝って日本語でしゃべるなど、やり方があるだろう。Audience に合わせてその場で決めればよいことで、決まりを作ておくような問題ではないだろう。〔大久保〕
  - 一般発表申し込み者に、英語で、と依頼するときの根拠が要るか。〔松田〕
  - これまで苦労して英語化してきた過去がある。〔有田〕
  - 伝えたいことは英語にする。書いたものは英語、Audience が全員日本人だったら、話は日本語。〔大久保〕
  - 議論は後にして全員の意見を順番に聞きたい。〔議長〕
  - CBRC の BiWO という研究発表イベントは英語化した。外国人のアンケート結果が、よくわかった、議論に参加できたと、非常によかった。英語に賛成。〔藤〕
  - 每年の年会長に任せたい。今年は有田年会長に任せたい。JSBi の規定で公用語を決める必要はない。〔ホートン〕
  - JSBi がどういう方向にいきたいかによる。先日オーガナイズした NGS 現場の会は、448 名の参加者があつて 403 件のポスター発表があつた。バイオインフォマティクスはいろいろなところ (wet など) から期待されている。こういうイベントは新しい人を巻き込むのに有効。20 年、30 年後にもバイオインフォマティクスが発展するために、もっと Biology-oriented な人を入れていきたい。そのためには「英語」規定はなくし、その場の状況に応じて変えられるようにしておきたい。〔岩崎〕
  - 2 つの側面から発言したい。
    1. 年会開催規定としては「原則として英語」にしておくのに賛成。実際のところ問題ないし、世の中の流れにも反しない。意思疎通のためなら、英語のポスターの前で、中国人どうしが中国語で議論してもいいではないか。
    2. 連合大会として開催する現実問題としては、間口を広げる、という点と、海外からの招待者との議論のしやすさ、の両方を堅持するべきであろう。プログラム委員やセッションオーガナイザーに任せられるよう、融通がきくようにしておきたい。〔中川〕
  - 日本分子生物学会も英語化しているし、「原則英語」の立場でいいと思う。確かに、去年は、CBI が日本語で JSBi が英語だったので、CBI 側から JSBi に来る人はいなかつたが。〔油谷〕
  - 年会長が決めたらいいと思う。英語、と決めつけてしまうのはあまり良くない。英語でのセッションとなると discussion は気が重い。年会長が試行錯誤するのがよい。英語化に関しては、会長メッセージを出したらどうか。これまでの議論もオープンに。〔中井〕
  - 発表は英語、discussion は日本語、のようなフレキシブルなやり方はどうか。（賛成の声あり）  
〔水野〕
  - 英語化議論が始まった当初は、英語化に反対だった。しかし、スライドや Proceedings は英語

でないと、流通性が悪いので、これを日本語 OK としてしまうことに反対だ。「ただし日本語のセッションをもうけることは妨げない」など書いておくのはどうか。〔浅井〕

- ・ 結論は、セッションごとに決める、あるいは年会長が決める、ということになりそうだが、規定に書いておくべきかどうか。〔松田〕

- ・ 少なくとも、書くもの（スライド、ポスター、Proceedings）は英語にしろ、という点は全員の意見が一致している。〔大久保〕

- ・ 今年の年会に関しては、企画で頑張っておられる有田先生におまかせしたいと思います。JBSi の規定に公用語を明記する必要はないと思います。〔ホートン〕

- ・ 「日本語の～妨げない」という浅井理事案は、同じことを二重に書いている？ 〔中川〕

- ・ その（「日本語の～妨げない」）部分は年会開催規定に記載する必要は無く、どのようなニュアンスかを説明している。〔浅井〕

- ・ （水野理事が言うような）flexibility の facilitator が要る。〔大久保〕

- ・ Session Chair が facilitator をやればいい。Discussion の内容を翻訳するなど。〔浅井〕

- ・ この問題はメッセージとして伝える必要がある。発表会場の Instruction に書けばよいか、別途出すべきか。

川島理事の意見（全部英語にすると、それがいやで来ない人もいるし、分野外の人に伝えられなくなる）もある。〔松田〕

- ・ 「原則として」の意味を明確にする必要がある。年会規定に書く必要はないが、公式な解釈を発表するべき。〔岩崎〕

- ・ （川島理事紹介の日本発生生物学会会長が「年頭のあいさつ」として表明した、英語化に向けたメッセージが浅井理事によって読み上げられた）

- ・ 年会規定に加えて会長メッセージを出すのはよい。実際に発表するときどうすべきかは、年会の受付で説明すればいいのではないか。〔藤〕

- ・ 今年の場合は、ポスター投稿は英語、発表は英語または日本語、と書いてある。〔有田〕

- ・ JSBi 側としてどうするか、明確化は？ 〔藤〕

- ・ していない。〔有田〕

- ・ 「伝われば何語でもいい」という意見もわかるが、アジア圏での日本の立場や存在感を維持しようと思ったら、公用語は英語、という方針を貫いたほうがよい。そのうち中国からの招待講演者が中国語で講演する日がくる。〔浅井〕

- ・ 今年1年のトレンドや新しい研究などをレビューするセッションを、年会初日の冒頭に作つたらどうか。これは周辺（分野）の人も入りやすいよう、マジョリティーの言語（＝日本語）でやればよい。（→いい意見だ、との声あり）〔中川〕

- ・ では会長メッセージを準備したい。素案を書くので、理事会メールで審議したのち発信する。〔松田〕

- ・ 連合大会のホームページにも、JSBi はこうする、という文を掲載する。

- ・ この際 CBI にも英語化をすすめるのはどうか。しかし連合大会の委員会が認めてくれるか、言つたらきいてくれるのか疑問である。

- ・ 資料は英語必須、発表はできれば英語でお願いしたい、議論はできれば英語が望ましい、と段階を追ってすすめればよいではないか。〔中川〕

- ・ 少なくとも発表素材は英語にしてほしい。〔松田〕
- ・ バイオインフォマティクスに近づきたい wet の人にどう対応するか、これからも考えていこう。〔岩崎〕

以上

上記の議決を明確にするため、議長及び議事録署名人において次に記名押印する。

平成24年 6月 / 日

特定非営利活動法人日本バイオインフォマティクス学会  
NPO 法人 日本バイオインフォマティクス学会  
印

議長 松田秀雄  
議事録署名人 浅井潔  
同 PAUL HORTON

